

【講演会等報告】

第 30 回北方民族文化シンポジウム 網走 [第 30 回記念大会]  
「北方民族研究 30 年 —成果・課題・博物館の役割—」

中 田 篤

開催日 : 2015 (平成 27) 年 10 月 24 日 (土)、25 日 (日)  
開催場所 : オホーツク・文化交流センター (エコーセンター2000) 大会議室  
主催 : 一般財団法人北方文化振興協会・北海道立北方民族博物館  
後援 : 北海道民族学会ほか

1986 年に始まった「北方民族文化シンポジウム」は、北方民族文化を対象とした国際シンポジウムとして、これまで北方諸民族の伝統文化、歴史、社会問題などさまざまなテーマを取り上げてきた。第 30 回目を迎えた今回は、「北方民族研究 30 年—成果・課題・博物館の役割—」をテーマとし、シンポジウムが継続されてきた時間を北方民族研究の発展とともに振りかえるという企画だった。第 30 回記念大会として記念講演が開催されたほか、文化人類学、考古学、言語学、博物館学など諸分野の専門家により、北方民族研究の近年の動向や成果、今後の課題、博物館との連携等について、二日間にわたり発表・討論がおこなわれた。筆者は主催者である北方民族博物館の職員として、ここ数年本シンポジウムの企画・運営に携わってきた。本稿では、昨年 10 月におこなわれた第 30 回北方民族文化シンポジウムの内容について紹介したい。

シンポジウム第一日目は、開会式の後、最初にエーリッヒ・カステン氏 (シベリア文化財団) による記念講演「ロシア極東における文化的多様性維持のための問題と取り組み」がおこなわれた。カステン氏は、危機に瀕した先住民文化の多様性を維持するため、特に先住民社会に適切な情報を提供する目的で開発してきたマルチメディア型の記録法とその活用を中心に論じた。この方法では、360 度写真、先住民言語による情報の音声記録、伝統的な道具などの製作と使用に関する映像、デジタル化した文献資料などを総合的に扱っており、その内容はウェブサイトを通じて世界に発信されている。カステン氏らはカムチャツカ半島の先住民集団などと協力し、情報の記録・保存だけでなく、ヨーロッパを中心に各地で普及活動をおこない、そうした活動によって民族文化の維持・発展を支援してきたのである。

続く第 1 部「ロシア・シベリア地域における状況」では、私が座長を務め、ロシア・シベリア地域を主要なフィールドとする二人の日本人文化人類学者に、おもにソ連崩壊後の研究状況の変化について発表いただいた。佐々木史郎氏 (国立民族学博物館) は「シベリア・極東ロシア調査の 30 年」と題し、ご自身の研究史を軸に、ソ連崩壊前後から現在に至る日本人によるシベリア・極東ロシアの研究活動について紹介した。本シンポジウムの開始や北方民族博物館の創設はソ連崩壊前後の時期にあたり、日本の新しいシベリア・極東ロシア研究の歩みとほぼ同期しているとのことだった。渡邊日日氏 (東京大学) は、「シベリアの文化人類学の変化と展望」として、1990 年代以降の英語圏におけるシベリア研究史

## 【プログラム】

10/24(土)		10/25(日)	
08:30	受付	09:00	受付
09:00	開会式	09:30	第3部: 北方文化研究諸分野の立場から
09:20	記念講演 「ロシア極東における文化的多様性維持のための問題と取り組み」 エーリッヒ カステン(シベリア文化財団)		「オホーツク海沿岸の考古学 —成果と展望—」 高瀬克範(北海道大学)
10:30	第1部: ロシア・シベリア地域における状況 「シベリア・極東ロシア研究の30年」 佐々木史郎(国立民族学博物館) 「シベリアの文化人類学の変化と展望」 渡邊日日(東京大学) 座長: 中田篤(北海道立北方民族博物館)		「日本における北方諸言語研究の過去・現在・未来」 呉人 恵(富山大学) 座長: 津曲敏郎(北海道大学)
12:30	昼食	12:00	昼食
13:30	第2部: 北米・北太平洋地域の状況 「侮辱への対抗: 北太平洋地域の先住民・文化の保護に関する文化人類学・博物館の努力についての歴史的視座」 デイビッド ケスター(アラスカ大学フェアバンクス) 「北アメリカの北太平洋沿岸地域と極北・亜極北地域の先住民文化に関する文化人類学研究の最近の動向: 日本人人類学者および日本の博物館・大学による貢献」 岸上伸啓(国立民族学博物館) 座長: スチュアート ヘンリ(放送大学)	13:00	第4部: 博物館の立場から 「先住民と博物館—北海道博物館における展示事例」 大坂拓(北海道博物館) 「北方民族文化シンポジウムの30年」 笹倉いる美(北海道立北方民族博物館) 座長: 佐々木史郎(国立民族学博物館)
		15:30	総合討論 座長: スチュアート ヘンリ(放送大学)
16:00	北方民族博物館視察	16:00	閉会式
18:30	レセプション		

を概観し、これまでの成果とともに現在の研究動向の変化、今後の展望について述べた。ソ連崩壊以降、シベリアにおける文化人類学的研究はポスト社会主義の人類学として英米圏や日本で大きく発展してきたが、近年は旧社会主義圏が「特殊」な研究領域ではなくなってきたとしている。

昼食をはさんで午後からは、スチュアート ヘンリ氏(放送大学)を座長に、第2部「北米・北太平洋地域の状況」がおこなわれた。まず、デイビッド・ケスター氏(アラスカ大学フェアバンクス)が「侮辱への対抗: 北太平洋地域の先住民・文化の保護に関する文化人類学・博物館の努力についての歴史的視座」と題し、多くの事例から、18、19世紀に北太平洋地域を訪れた外来者(征服者、交易者、探検家・科学者など)による先住民に対す

る侮辱的表現と、20世紀以降の文化人類学者や博物館による反・侮辱的な記述や展示活動について紹介した。次に岸上伸啓氏（国立民族学博物館）は、「北アメリカの北太平洋沿岸地域と極北・亜極北地域の先住民文化に関する文化人類学研究の最近の動向—日本人類学者および日本の博物館・大学による貢献—」として、日本における北米北方地域の研究史、現在の課題について報告した。日本では生業や社会変化に関する研究が発展した一方、21世紀に入り若手研究者の減少問題に直面しており、大学・大学院での北方先住民研究コースの整備が望まれる状況になっているとのことだった。

一日目の発表・討論はここまでで、この後、希望者を対象とした北海道立北方民族博物館の視察、レセプションがおこなわれた。

二日目には、まず午前中に第3部「北方文化研究諸分野の立場から」がおこなわれ、津曲敏郎氏（北海道大学／当学会会員）を座長に、北方地域を調査地とする考古学、言語学の専門家に発表いただいた。まず、高瀬克範氏（北海道大学）は、「オホーツク海沿岸の考古学—成果と展望—」と題し、過去20年、国際共同調査の活発化によりオホーツク海沿岸地域の考古学が大きな成果を上げてきたこと、1）次世代研究者の育成、2）研究対象地域の細分化、3）関連分野との連携、4）博物館との連携などの点で課題が残されていることを述べた。次に呉人恵氏（富山大学）は、「日本における北方諸言語研究の過去・現在・未来」と題し、北方諸言語の専門家に対しておこなったアンケート調査から、日本の北方諸言語研究の状況と課題について述べた。日本の北方諸言語研究は1990年代以降に活発化した。近年話者の高齢化や減少、優勢言語への同化により、言語の復興保持や新たな言語事実を発見する可能性が低下し、若手研究者の育成に関しても課題があることが指摘された。

午後の第4部「博物館の立場から」では、佐々木史郎氏（国立民族学博物館）を座長とし、博物館関係者による発表がおこなわれた。まず大坂拓氏（北海道博物館）が「先住民と博物館—北海道博物館における展示事例—」として、平成27年4月に誕生した北海道博物館におけるアイヌ文化展示の特色を紹介した。その一部は、札幌市在住の小学生が祖父母の語りから先祖の歩みを学ぶというストーリーで構成され、アイヌの近現代史をリアルな生活体験として想像する機会を提供している点で特徴的ということである。次に笹倉美氏（北海道立北方民族博物館）が「北方民族文化シンポジウムの30年」と題し、北方民族博物館や北方民族文化研究を取り巻く状況の変化とともに、本シンポジウムの30年間の成果をふりかえり、今後のシンポジウムと北方民族博物館の展望について述べた。

すべての発表が終わった後、最後にスチュアート・ヘンリ氏（放送大学）の司会により総合討論がおこなわれた。このなかでは、国際交流や総合的・学際的研究の重要性、博物館の役割、若手研究者の育成など、ここまでの発表に共通した課題が取り上げられ、各発表者や座長、一般参加者なども加わって活発な質疑・討論がおこなわれた。

以上、第30回北方民族文化シンポジウムの内容を紹介してきた。主催者側の立場からすると、今回のシンポジウムは、発表者、座長、一般参加者の方々の積極的な協力により、内容的にも運営上も一定の成功を取めたと考えている。

ただし、もちろんいくつか課題も見えている。そのなかでもっとも大きな問題と考えているのは、一般参加者の少なさである。本シンポジウムは参加無料であり、特に参加制限を設けているわけでもないが、専門性が高い内容となっているため、一般市民の参加が少ないのはある程度理解できる。ただ、北方民族文化や文化人類学の専門家、研究者、学生・大学院生などの



会場の様子

一般参加は、もう少し多くてもいいのではないかという思いでいる。網走市やその近郊以外に住んでいる方からすれば、時間と交通費・宿泊費というコストが大きいということなのかも知れない。しかし、第一線で活躍している研究者たちの発表をまとめて聞くことができるだけでなく、直接質問したり、討論に参加したりすることができるという機会はあまりないのではないだろうか。そうした価値を認めていただいているのか、数は少ないが、札幌市在住の当学会会員で毎年のように参加してくださる方もおられる。当学会には本シンポジウムを後援していただいているが、名目的な後援だけでなく、ぜひもっと多くの会員に、参加してこのシンポジウムを盛り上げていただきたいと考えている。

(なかだ・あつし／北海道立北方民族博物館 主任学芸員)